琉球大学学術リポジトリ

教職指導と学校教育実践研究の概要

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 敏洋, 城間, 盛市, Shimoji, Toshihiro, Shiroma, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19035

教職指導と学校教育実践研究の概要

下地　敏洋*　城間　盛市**

Outline of Teacher's Training Guidance and Practical Research for School Education

Toshihiro SHIMOJI*　Seiichi SHIROMA**

本報は、教職科目の「教職指導」と「学校教育実践研究」の指導内容に工夫・改善を図ることが、教師を希望する学生にどのような効果があるのかについて報告することが目的である。

最初に、「教職指導」においては、教師の基本的な資質である教科指導技術を養成することに加えて、学校現場で実施される「学校一日体験プログラム」を通して教科指導、学級経営、そして部活動などを総合的に関連させることができる。そのことにより、教育に対する視点が学生から教師としての立場へ移行することで、将来の教師像を客観的に見つめる機会となるばかりでなく、課題などの把握にも寄与していることが明らかになってきた。

次に、「学校教育実践研究」においては、教師の現状や課題などを理解することで、教師としての使命感を高め、教育実習の事前指導として「模擬授業」を実施した。そのことにより、教科指導に必要な基本的技術の習得、学習指導案の作成を通して、教科書の活用方法、生徒の学習活動、板書計画の在り方などの研究に加え、 教育基本法など教育関連法規や学習指導要領の理解に寄与していることが明らかになった。

昨今の教育基本法の改正、学習指導要領の全面改定などに象徴されるように教育環境は常に変化しており、教師に求められる力量も実践的コミュニケーション能力や組織マネジメントなど多様な変化に対応するものとなってきている。従って、教職科目においても教育環境の変化を見据え、教師の力量を高めるための指導内容となる一層の工夫・改善が必要であると考えられる。

Ⅰ．はじめに

国際化社会、情報化社会が進展する中、環境問題や経済問題など地球的規模で対応を求められる問題が増加している。国内においては、少子高齢化に伴う超高齢社会の到来や教育基本法の改正を象徴とする教育を取り巻く環境などに新たな対応を求められている。そのような時期において、教師の果たす役割もますます大きくなってきたように考えられる。

平成18年、教育基本法が改正され、条文に新たに「生涯学習の理念（第３条）」、「大学（第７条）」、「私立学校（第８条）」、「家庭教育（10条）」、「幼稚園の教育（第11条）」、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力（第13条）」、「教育振興基本計画（第17条）」が挿入されるなど、教師にはこれまで以上に多様な視点から

* 琉球大学教育学部
** 沖縄県立総合教育研究センター

教育を捉えることの重要性が高まってきた。

また、教育基本法の改正を受けて、学校教育法、教育職員免許法、地方教育行政法など教育改革関連三法も改正され、学校教育法の中で、義務教育の目標として「我が国と郷土を愛する態度を養う」、「副校長・主幹教諭、指導教諭」の職階の導入、教育職員免許法に「教員免許更新制」の新たな研修の導入、地方教育行政法に「教育委員会には法令違反があり、指導をしても改善されない場合、文部科学大臣が是正勧告・指示ができる」などの文言が挿入された。

さらに、学習指導要領は、幼稚園、小学校、中学校が平成20年３月28日、高等学校が平成21年３月９日に全面改定された。新学習指導要領では、「ゆとり教育」の反省を踏まえ、「基礎・基本の習得」が強調され、「総合的な学習の時間」や中学校の選択科目が削減される一方で、国語、算数・数学、英語などの授業時間が増加した。全体的な増加時間は、小学校で約10%、中学校で約12%など、減少傾向にあった総授業時間数が約50年ぶりに増加に転じた。

高等学校では、全体的に大きな変化は見られないものの言語能力の育成、理数教育、伝統・文化教育、道徳教育、体験活動の充実が強調されている。

このような教育基本法の改正及び学習指導要領の改定を受け、大学の教員養成においても従来の教職科目の指導内容に加えて、社会環境の変化に対応した一層の工夫改善が求められている。つまり、このような時期において、大学での教員養成の在り方にも新たな取り組みが必要となっていると考えられる。

琉球大学におけるこれまでの教員養成は、教科指導をはじめ、教職科目は教育学部を中心に各学部の教員の連携のもとに実施されてきた。しかしながら、教育学部生涯教育課程や他学部の学生に対する教育実習の事前指導など学校教育に実践的な指導は必ずしも十分なものとはいえなかった。その結果、実習生配置校の教育現場からは、学習指導案の書き方や教科指導法、教育実習に臨む態度等について多くの課題が指摘されていた。

平成19年３月、琉球大学と沖縄県教育委員会で人事交流協定書が締結された。同年４月に沖縄県教育委員会から琉球大学に職員が派遣されて制度がスタートしたことを機に、教育学部生涯教育課程や他学部の教員を希望する学生に対して、教職科目の指導内容に一層の工夫・改善を図った。具体的には、実践的教科指導力の向上や教育現場の実情を伝え、教師としての力量を高めることにした。

教職に関する履修モデルは資料１に示すとおりである。

また、「教職指導」と「学校教育実践研究」の指導項目や内容の計画にあたって、教育現場の実践や実態を踏まえて、「なぜ教師をめざすのか」、「教師の職務内容の種類にはどのようなものがあるのか」、「教師に必要な力量とは何なのか」、「実践的指導力とは何なのか」、「教育実習の在り方」、などの内容に一層の工夫・改善を図った。

本報においては、新たに指導内容等に工夫・改善を図った「教職指導」と「学校教育実践研究」について、講義の実践内容に基づき現状と課題等について報告する。

Ⅱ．教職科目について

Ａ．教職指導

１．目　的

教師の基本的な資質として、教科指導における指導能力を大学で教職科目を履修することで養成することが重要であり、併せて教科外（学級経営・生徒会・クラブ活動・部活動等）の指導も教員の大切な使命である。したがって、それらの指導力を高めるため、大学初年度から本科目を履修させ、教員免許取得を目指す学生に必修科目として設定した。

２．講義内容

科目の主な内容としては、（１）学校現場での職場体験、（２）グループ・ディスカッション（今日的教育課題等）、（３）部活指導の在り方等であり、これらのことを体系的・計画的に履修させることで、学生に対して質の高い学習を保証している。また、学校現場においてコミュニ

ケーション能力が十分でない教員の増加という現状を踏まえ、グループ・ディスカッションなどを取り入れることにより、実践的コミュニケーション能力の育成に努めている。

3．具体的な講義内容（表１）

事前ガイダンスを実施し、講義の目的、教師の仕事内容について説明を行い、教師に対する使命感の育成に努めている。

表１　具体的な講義内容（教職指導）

回数	項目	内容
第１回	「教師としての使命感・職業観、教育実習に参加するまで及び教員になるまでの過程について」	(1) 自己紹介（講座担当）、授業計画の説明 ・グループ編成 (2) 教師としての使命感について ・教師としての役割、業務内容、教育実習の様子など (3)【課題２】テーマ：「今日の教育的課題について」
第２回	「教育法規の体系（教員採用試験に向けてこれからやるべきこと）」	「教育法規の体系（教員採用試験に向けてこれからやるべきこと）」 (1) 教育法規の体系化についての解説 (2)「教育基本法」、「学校教育法」、「教育公務員特例法」、「地方公務員法」、「地教行法」の解説、演習
第３回	「部活指導の在り方について」	(1) 部活指導の実態について（安全指導等） (2)「部活指導の功罪について」グループ討議及びグループ代表発表
第４回	「今日的教育課題をテーマとしたグループディスカッション、全体発表」	・「中退問題」、「いじめ問題」、「教育再生会議報告」等をテーマ設定 (1) 課題２について、グループ内で発表 (2)「ネットいじめ」、「モンスターペアレント」などの今日的な新たな教育課題についてのグループ討議及びグループ代表発表
第５回	「担当教員による模擬授業の展開」	・模擬授業は、ＬＨＲや教科について担当教員が実施する (1) 学習指導案の解説 (2) 模擬授業（30分程度） (3) ＬＨＲや総合的な学習の時間、道徳教育の重要性について
第６回	「学習指導要領について」	(1) 学習指導要領の流れ（歴史的背景など） (2) 改訂学習指導要領の解説 (3)【課題３】　テーマ：「理想とする教師像について
第７回	「理想とする教師像について」	・将来教師になろうとする学生同士がお互いの理想する教師像を語ることで、より深く教師に対する憧れや職業意識を高めることをねらいとする。 (1) 課題３の「理想とする教師像」について、各自発表 (2) 教師の抱える問題「精神性疾患の増大など」についてグループ討議及びグループ代表発表
第８回	「職場体験直前指導Ⅰ」	・学校の組織及び役割
第９回	「職場体験直前指導Ⅱ」	(1) 職場体験の意義（前年度の学生の感想など） (2) 諸注意事項の確認 (3) 職場体験記録用紙の配布及び記入方法の指導 (4) リーダーの選出（まとめ役及び出席係等）
第10回～第13回	「学校現場での職場１日体験」	詳細は資料２参照
第14回	「職場体験報告会」	(1) 職場体験を経験しての感想を発表 (2) 課題４：「職場体験記録簿」の提出
第15回	「まとめ」	(1) 本講義のまとめ (2) 授業評価アンケート実施（約15分）

また、本講義は登録した318名を６クラスで展開し、６名の講師（コーディネーター１名、非常勤５名）で実施した。318名の内訳は、教育学部78名、法文学部112名、観光産業科学部７名、理学部87名、工学部15名、農学部19名であった。

なお、「学校一日体験プログラム」の引率は、受け入れ校の規模や研修の効率性を考慮して12校で実施するため、担当講師６名に各学部教員養成運営委員の教員６名を加えた12名で実施した。

４．「学校一日体験プログラム」に参加した学生の感想

学生は、本講義の項目の中でも、特に学校一日体験プログラムの成果を高く評価している。本プラグラムを通して、学生から教師としての目線で生徒や学校の実態を捉えるなどの意識の変容をもたらしていることが、学生の記録から理解することができる。

「学校一日体験プログラム」を終えた後の「職場体験報告会」における学生の生の声を一部抜粋し、紹介する。

○　「学生としてじゃなく高校に行くことは初めてで、とても緊張しましたが元気よく笑顔であいさつしてくれる生徒が結構いて、それにとても助けられました。

一番驚いたのが、先生と生徒がとてもフレンドリーだったことです。少人数ということもあると思いますが、生徒が全員授業に参加しているという感じを受けました。

先輩教師の講話は学ぶことがとても多く、その中でも、「生徒を驚かす（惹きつける）授業展開をする」という話で、「小学生と比べると真っ白とまではいかないけれど、まだまだ色の少ない生徒に色を付けていく、どんどん新しいことを吸収してもらうためにも生徒に衝撃を与える。つまり、驚かせ、惹きつける授業をするのが先生の役割だと思う」と言っていたことがとても印象的でした。「先生たちって大変なんだ」とか「休みもないです」とか話している時も、何だか誇らしげな感じがして、「本当に先生という職業を誇りに思っているんだ、生徒が好きなんだな」と感じました。

一日でしたが、とても多くの事を得られた良い機会だったと思います。」（理学部学生）

○　「この一日インターンシップは私にとって、とても良い経験になりました。もし、今回のインターンシップがないまま、３年次に母校の実習に行けば、他の学校の状況も知らずにいたと思います。しかし、たった一日でも体験をすることで、様々な生徒がいること、学校によって独自な雰囲気があること、そして教師になるために必要なことを知ることができました。授業の一環として職場体験をしましたが、この体験は私に教師への夢をいっそ強く望ませるものとなりました。今後もこのインターンシップから得たことを忘れずに日々の勉強の糧として生きたいと思います。」（法文学部学生）

○　「今日は一日体験ということで、初めはとても緊張し、上手く話そうと考えて身構えていました。しかし、朝のSHRで元気な生徒を見ると緊張もとけ、上手く話すことはないのだと思いました。２年10組の担当をしましたが、とても元気が良く、積極的に話しかけてくれてとても嬉しかったです。Ａ高校は進学校であることから、「琉大はどんな学校ですか？」や「先生の学科は、どんなことが学べるんですか？」「学校は楽しいですか？」と大学のことをたくさん聞かれ、やはり、２年生から具体的に自分の将来の事を考えているのだなと感じました。

Ａ高校は、文武両道を掲げている学校ですが、放課後も様々な部やクラブが活動しており、学習面だけでなく部活動面でもかなり活発で、生徒みんなが生き生きしていました。今日は一日だけの体験学習でしたが、生徒たちから「先生」と呼ばれ、嬉しくもあり恥ずかしかったです。ですが、一日を通してみて、やはり私は教師になりたいと心から感じました。本当に今日は貴重な体験をさせていただきありがとうございました。」（農学部学生）

○　「初めて沖縄の商業科の高校に行ってみて、

自分の高校の頃を思い出して懐かしいと思う部分もあったり、自分の高校の頃との違いに驚いた部分もあった。生徒たちは、にぎやかすぎるくらいにぎやかで、先生が注意してもだまらなかったりということもあったけれど、決して生徒と先生は仲が悪いわけではなく、むしろすごく仲が良いと感じた。それはきっと、先生が生徒ひとりひとりとの会話や付き合いを大事にしていて、生徒たちを信頼しているから、生徒たちも先生を信頼し、失礼なことを言ったりすることもあっても、ちゃんと尊敬もしているからだと思った。

授業やＨＲを見学して一番感じたことは、そういう先生と生徒の距離の近さだと思った。また、先生方の講話を聞いて、自分が学生側にいたときは、先生から聞いたことのない教師の大変さも新たに知ることができた。生徒たちは、とても明るくて積極的にあいさつをしてくれたり、声をかけてくれたり、先生と呼んでくれたり、授業・清掃・ＨＲの時など、とても楽しくて貴重な経験をすることができたと思う。」（工学部学生）

○　「学校の先生は、授業やＨＲなどが主な仕事だと思っていたが、職朝の話し合いや生徒の健康管理、授業の準備や事務業務など他にも数え切れないくらいの細かい仕事があることが分かった。実際教育環境は、本当に忙しそうで、ほとんどの先生がぴりぴりしているのが伝わってきた。ＳＨＲに参加したときは、自分たちが一年前まで、やっていたことが、とても新鮮に思えて学級の雰囲気などが懐かしく、それを教師の立場で見ると生徒が何をしているのか、顔色などを一望に見ることができた。これが教師の目線なんだなぁと思った。」（理学部学生）

○　「授業では、今日、学校が抱えている教育的課題や自分たちの理想とする教師像を発表し、他人の考えを聞く、模擬授業、授業の流れ、学習指導要領について、部活指導のあり方についてなど、初めての体験ばかりでとても良い経験になりました。教員の雑務が増加していてストレスがたまっていること、本採用されるまでに時間がかかること、１時間の授業に４～５時間準備が必要な時もあることなど、教員の辛い部分も知ることができ、より身近に感じることができました。職場体験では、初任研の先生の話を聞けて、とても参考になりました。辛いところもあるが、喜びや楽しさの方が大きいことを聞き、教員になることによりあこがれを感じました。大学１年でこんな体験ができたことをありがたく思い、今後もしっかり勉強していこうと思いました。」（法文学部学生）

○　「やはり、教師というものは情熱があるんだなぁと実感しました。先生というのは、クラスの授業の他にたくさんの事務仕事があるということを聞き、大変辛いこともあるそうですが、子供達が成長して卒業しても連絡を取れるととても嬉しいと言うことを聞いて、とてもやりがいのある職業だと思いました。教師になるには、たくさん勉強して、辛いこともあるだろうけど、大学の講義で事前に学んだことを職場体験を通して、より現実味あるものとなり、とても充実した１日を過ごすことができました。」（法文学部学生）

○　「先生達はとても忙しい仕事だと思いました。それぞれ一人一人役割があり、その上授業をしなくてはならない。授業をするにも教材作りもしなくはならない。とても時間が足りないと思いました。生徒には愛を持って指導していかなければいけないし、ただ仕事をするだけでは駄目だということに改めて気付かされました。情熱をもって仕事をするってとてもかっこいい職だと思いました。教師の一言で生徒は刺激を受けたり、感動したり、やる気になったりととてもすばらしい仕事だと思った。逆にやる気をなくさせたりとマイナスな言動を決してやってはいけないのでひと言一言に注意すべきだと思いました。夢を与えることのできる仕事だと言うことがとても魅力的でした。校長先生の講話の中で、指導力と自分自身の教科力という話があった。教科力をつけていれば、どんな指導の仕方でも生徒はついてくるということだった。「こ

の先生はできる！」と思えば生徒は話を聞く。確かにそう思いました。教科力があれば指導力なんて工夫すればいいだけだ。その話を聞いて、私も専門分野の勉強を頑張ろうと思った。そして、いろいろなことを体験し、いろいろな知識を身につけたいと思った。現場にいる先生方からいろいろな話をきいて、とても為になった。１日だけだったけど、とてもいい経験になった。」（法文学部学生）

○　「今まで生徒として過ごしてきた学校の中で、教師側の立場から改めて学校という教育現場を見ていると、いろいろな発見がありました。よくよく観察していて分かったことだが、先生方はまずコミュニケーションを絶えず織り交ぜながら授業をしています。これは、大切なことではあるが、非常に難しいと思います。それを自然に平気でこなす先生方は立派だと思いました。また、教師は生徒の手本となるべく、時間厳守、あいさつ、服装や言葉遣いにはとても気をつける必要があります。教師の仕事は非常に急がしいものだそうで、生活習慣にも気をつけることが仕事の維持、向上には大切です。」（工学部学生）

○　「体験を通して、自分が今まで思い描いていた教師のイメージががらりと変わり、教師という仕事の現状を垣間見ることができました。職員会議での情報交換や授業を客観的に見学し、教師の立場になり考えていくことで、教師の大変さややりがい、楽しさなどが直に伝わる良い経験ができました。

　指導する側はただ教えるだけではなく、相手に対する気持ちや熱意、注意力、判断力など様々な面で優れていなければいけないのだと改めて実感した。自分自身の表現力や言語力、応用力はまだまだ未熟なので、これから大学生活で養っていきたいと思った。これからの努力がさらなる自身のステップアップになるんだとやる気がでるきっかけとなった実習でした。」（教育学部学生）

○　「今日一日、Ｎ高校へ職場体験をさせてもらい、高校生の頃は違う視点で高校という場所、先生達の授業を見ることができました。高校生の頃は「先生とは授業だけをして生徒を見るだけでいい。」というイメージが頭のどこかにあったものの、実際に教員という立場で先生の仕事を見ていると、授業や生徒と関わるだけではなく、事務作業や職員会議の出席、授業に使うプリントの印刷など様々な雑務があり、教員は授業をして生徒と関わるだけが仕事ではないことを実感しました。また、教員としての立場で生徒と触れ合ってみると、高校生の頃、級友と話す感覚で生徒と話しては思うようにコミュニケーションがとれないことも分かりました。しかし、先生方が生徒とふれあい、生徒とともに学び成長していくことに教員としての喜びを感じているように、たった１日でしたが、先生という立場で生徒と触れあい、会話することで私も教員としての喜びを感じることができ、これから教職という講義をとり、教員という仕事を学んでいく上で、今回の職場体験は大きな支えとなることができると思います。」（教育学部学生）

○　職場体験を通して、まず私が感じたことは、朝の大職員室での話し合いの時、教員の連絡事項の多さ、口述の早さ、そこで一瞬で理解する教員の能力に驚きました。又、夏休み中に行った大会で賞を得た生徒達に対する温かい拍手や教員の残した功績もみんなで祝う姿を見て、学校全体で雰囲気を盛り上げていこうとする思いが伝わりました。

　また、校内を歩いていると、生徒が積極的に挨拶をしてくる姿はとても驚きました。私達よりも先に挨拶してきたので、これではいけないと思い、私も積極的に挨拶するように始めました。最後に、ＨＲ教室で今日一日のお礼の挨拶をするときに、生徒全員が私を見て、挨拶をしっかり聞いてくれた姿勢にはすごく感動しました。最後の温かい拍手はとても嬉しかったです。Ｎ高校で職場体験したことは、大きな経験になりました。」（法文学部学生）

このように、「学校一日体験プログラム」を

通して、教師という職業を生徒という立場から客観的に考えることができるようになってきたことも成果の一つと考えられる。このように、早期の段階で教育現場の現状に直に触れることで、教師という職業が自分に適しているのかどうか、真剣に考えるきっかけともなるものと考えられる。

佐藤(2007)は、「教師としての社会的地位」などの客観的ファクターや「過去における素晴らしい教師との出会い」などの主観的ファクターも教師をめざす理由と述べているが、「学校一日体験プログラム」などで教育現場の現実を目にすることで、両ファクターが融合する機会に寄与するものと推測される。つまり、教師の職務が授業や部活動だけではなく、多様な仕事があること、表面に現れる仕事はまさに氷山の一角であることが理解できたのではないだろうか。

次に、課題としては、講義形態が集中講義を要すること、かつ夏季休業中に実施しなければならないこと、課題の資料探しや作成のための十分な時間の確保の必要性などがあげられる。特に、実施時期は、当初は中学校及び高校の行事日程等を考慮し、11月中旬頃が最適と考えていた。しかし、この期間は他の講義も実施されているなどの理由で、初年度（平成19年度）は2月下旬に実施した。ところが、実施校（中・高校）の負担が大きく、平成21年度から夏季休業中の9月下旬に日程を移動した経緯がある。それでもなお、この時期、実施対象校となる近隣の中学校や高等学校の中には、2学期制を導入している学校も多くあり、期末考査の実施期間や文化祭など学校行事の実施時期と重複するため、再考が求められている。

「学校一日体験プログラム」の実施校からは、研修プログラムの内容、参加する学生の態度、大学側との連携の在り方などについて改善の指摘がある。

B．「学校教育実践研究」と「学校教育実践研究Ⅰ」

1．科目拡充の経緯

教育学部生涯教育課程及び他学部において、教員を目指す学生は4年次に公私立学校等で教育実習が課せられる。昨今の学校現場は様々な面で非常に厳しい状況にあり、教育実習へ送り出すには、従来の事前指導だけでは十分とはいえない。

従って、従来の教育実習事前・事後指導としての役割をもっている科目「学校教育実践研究」を2つの時期に分け、平成19年度入学生より新たに3年次後期に教育実習事前指導として「学校教育実践研究Ⅰ」、4年次前期に教育実習直前・直後指導として「学校教育実践研究Ⅱ」を設定し、特に学校現場からの要請の強い内容を重点的に取り入れることによって、教育実習生としての資質の向上を図ることにした。

本科目の講義内容は教育法規の理解、学習指導案の作成や模擬授業を中心とした教科指導、学級経営、子ども理解、及び生徒指導など多岐にわたるが、すべてにおいて理論と実践の融合を目指し、「教育実習生の視点からの内容」を共通のコンセプトとしてより学びを深め、演習することをねらいとしている。

2．「学校教育実践研究」について

（1）目　的

教職をめざす学生に対し、教職の現実を理解させるとことと同時に使命感の育成を図り、教育実習がスムーズに実施できるよう事前・事後指導を行うことを目的とする。

（2）講義内容

事前指導として、（1）学習指導案の作成、（2）模擬授業の実施が主である。教育実習においては、教科の授業を受け持つため、学生自身が模擬授業を体験することで本番の教育実習がスムーズにいくことをねらいとする。

事後指導においては、教育実習後の報告会を開催することで全員が教員として職の重要性ややりがい等を共有する。

（3）具体的な講義内容（表2）

(a) 下記に旧課程の「学校教育実践研究」の講義内容について記述する。

(b) 講義後の学生の感想

本講義に対する学生の感想や要望について、第13回講義「「教育実習事後指導Ⅰ」の発表や

表２　具体的な講義内容（学校教育実践研究）

回数	項目	内容
第１回	「オリエンテーション（ガイダンスの内容の再確認及び教育実習事前指導等）」	① 講師紹介 ② 講義を受けるにあたっての諸注意 ・遅刻、結果等の取扱いについて ・模擬授業受講の身だしなみについて ③ 教育実習での心得：「実習の手引き」使用
第２回	「教師としての職業観について教師の置かれている現状等）」	①講義の進め方と諸注意 ②自己紹介(講師) ③課題１　テーマ「自己紹介文」
第３回	「学習指導案について（学習指導案の意義、学習指導案の書き方等）」	①学習指導案の書き方(教科) ②学習指導案の書き方(総合的な学習の時間) ③模擬授業の実施説明
第４回	「自己紹介の訓練（自己紹介の実施等）」	自己紹介を全員実施
第５回～第７回	「模擬授業Ⅰ～Ⅲ（土曜日集中講義）」	
第８回	「教育の課題について」	①教職員の不祥事の実態について ②いじめ、不登校、体罰等について ・グループ討議及び発表
第９回～第11回	「模擬授業Ⅳ～Ⅵ（土曜日集中講義）」	
第12回	「教育実習直前指導（教育実習生としての心得等）」	①教育実習生としての心得(再確認) ②学習指導案の書き方(再確認) ③教員採用試験に関すること
第13回	「教育実習事後指導Ⅰ」	①教育実習校を訪問しての感想(講座担当) ②教育実習を終えての感想(全員)
第14回	「教育実習事後指導Ⅱ」	①学習指導要領の解説（改訂） ②教員採用試験等
第15回	「教育実習事後指導Ⅲ」	①教員としてのモラルの構築 ②教員としての職務等

提出課題を中心に一部抜粋で紹介する。

・「模擬授業を２０分だけでなく、たくさんやって欲しかった。環境も改善する必要がある。」
・「発表する機会がたくさんあったこと、遅刻に厳しいことがよかった。」
・「模擬授業のとき黒板を使ってやりたかった。」
・「(模擬授業は)文系、理系を混ぜてやった方がよかった。」
・「実際の学校現場の授業風景などのビデオを見たかった。」
・「より実践に近い模擬授業（時間の配分）がしたかった。」
・「HRの練習を取り入れる。」
・「心構え（ができた）」
・「他人の授業をみることができた。」
・「(模擬授業は）土曜日でなく、平日がよかった。」
・「模擬授業が終わった後のグループ内での反省会があったのがよかった。」
・「模擬授業をしての意味、成果があまり感じることができなかったので、何がとはまだ言えないが改善した方が良いと思う。」
・「他人の模擬授業案をすべてみてみたい。」
・「模擬授業の時間をもう少し長くやりたい。」
・「学習指導案の書き方や模擬授業をもっと具体的に指導して欲しい。」

・「現役教諭の生の声を聞ける機会が欲しかった。」
・「模擬授業の回数をもっと増やして欲しい。」
・「模擬授業の評価をもっとして欲しい。」
・「いろいろな教科の模擬授業をみることができてよかった。」
・「座学だけでなく、グループワークなどもっと入れて欲しい。」

などの感想や要望があった。

(c) 講義後の課題

本講義に関しては、学生から教育実習の事前指導及び事後指導として一定の成果や評価を得ているものの、模擬授業については実施時間や実施回数等については改善の必要性がある。

本科目は、教育実習事前及び事後の講義として設置されている。そのため、6月に実施される教育実習の開始時までに模擬授業などの実践的な指導、実践的コミュニケーション能力などを養成する必要性から、土曜日に集中講義を余儀なくされるなど、時間的ゆとりの確保が十分とはいえない現状にあった。そのような状況において、学習指導案の書き方や教科指導力などの向上、学級経営のための基本的な能力の育成、学校教育関連法規の理解度を高めることなどに課題が残った。これらの課題の解決を図るため、十分に時間をかけ教育実習に必要な問題解決型の教育研修を推進する必要がある。そのため、平成21年度後学期より3年次で「学校教育実践研究Ⅰ」、平成22年度前学期より4年次で「学校教育実践研究Ⅱ」として学ぶことで、教師としての実践的指導力を高めることとした。

3.「学校教育実践研究Ⅰ」

(1) 目的

教職を目指す学生に対し、教職の現実を理解させることと同時に使命感の育成を図ることと、教育法規の理解及び学習指導案作成並びに模擬授業を中心とした教科指導や学級経営、児童生徒理解、生徒指導等について多岐にわたり学ぶことを目的とする。

(2) 講義内容

模擬授業を全員に課すとともに、教育現場の課題等について意見交換を行うものとする。また、教育基本法や学校教育法などの教育関連法規についても定着を図るもとする。

(3) 具体的な講義内容（表3）

本講義は、今年度の開設で、かつ進行中であるため、講義終了後に成果や課題についてまとめることとする。

表3　具体的な講義内容（学校教育実践研究Ⅰ）

回数	項目	内容
第1回	「ガイダンス」	①自己紹介 ②講義内容 ③講義を受けるにあたっての諸注意 ④教育実習仮登録について
第2回	「学習指導要領及び教育基本法並びに関連法規について」	①教育基本法 ②学校教育法及び関連法規 ③学習指導要領
第3回	「学習指導案について」	①学習指導案の書き方(教科) ②学習指導案の書き方(総合的な学習の時間) ③模擬授業実施説明
第4回 ～ 第13回	「模擬授業Ⅰ～X」	①模擬授業の実施 ②模擬授業の反省及び討議 ③指導・助言
第14回	「模擬授業の実践演習を通しての全体総括」	①模擬授業及び学習指導案について
第15回	「授業のまとめ」	①教育実習校との連絡調整について ②「学校教育実践研究II」について

ところで、教師の特殊性について、佐藤(2007)は、「仕事への勤勉性」、「奉仕的精神」、「子どもに対する模範性」、「高い倫理観」を有する点にあるため、聖職であると述べている。学生は聖職である教師の理想像を持っていると考えられるが、それはどのようなものであろうか。「理想の教師像」を学生の発表から紹介する。

・生徒をよく見て、理解できている人
・一人ひとりを観てくれる教師（個性を尊重してくれる）
・熱意と情熱を持っている教師
・授業が分かりやすく、（生徒を授業に）参加させてくれる教師
・親しみやすく、生徒から相談を持ちかけられるような教師
・（どの生徒にも）平等に接しくれる人
・自分自身が授業を楽しんでいる教師
・生徒への愛情と教育への情熱を持っている人
・社会に対して責任の持てる人
・専門分野を通して社会について考えさせる授業を行える人（授業に自発的に参加ができるようにする）
・オーラを持つ人（自信を持っている）
・周りが見える人
・（生徒との距離が近く、かつ）生徒保護者から尊敬されている人
・自分自身が人生を楽しんでいる人
・生徒とよくコミュニケーションを取り、信頼関係を築ける教師
・生徒の立場になって考えられる教師
・教師としての倫理観が備わっている教師
・生徒の持つ可能性を引き出し、さらにその可能性を人のために生かす素晴らしさ、喜びを伝えられる教師
・注意がちゃんとできるようなけじめのある教師
・謙虚であまり自慢話をしない教師
・担当しているクラスだけでなく、自分の持っていない生徒も見てあげることのできる教師
・話が面白くて、生徒の興味を引くことができる教師
・授業だけでなく、休み時間や放課後にも生徒とコミュニケーションのとれる教師
・専門科目に加えて教養が豊富
・展開力がある先生
・生徒の話をよく聞いた上で、自分の考えを述べられる教師
・自己満足な授業をしない教師

このように、教科指導力だけでなく、人間的魅力やコミュニケーション力なども教師として高い評価を得ていることが理解できる。

Ⅲ．まとめ

学校教育を牽引するのは、教師であると言っても過言ではない。すなわち、教師には教科指導力、学級経営力、部活動など特別活動の指導力、保護者や地域との連携を図るコミュニケーション力など、多様な能力が求められている。従って、大学での教員養成に関する科目等においては、教師としての基礎・基本となる資質が定着し応用できることが大切であると考えられる。

そのような状況を踏まえて、琉球大学教育学部においても、資質の高い教員を養成するため、これまで指導科目の内容に工夫・改善を図ってきた。

平成19年度に設置した「教職指導」においては、早期の段階で教員になるための自覚と意識を高め、かつ教員として必要な教科指導力や学級経営力などを高めることを目的としている。アンケート調査結果によると、本講義の内容に対して学生は一定の評価を与えているものと考えられる。特に、「学校体験一日プログラム」においては、教育現場で教育の現状に触れることで、初めて教師という立場や目線で生徒や教師との関係をとらえることができるようになっている。これらのことは、客観的な立場で教師としての自分を見つめることになり、教員を目指す上で貴重な機会となっていることが考えられる。

今後の課題としては、「学校一日体験プログラム」を受け入れる中学校の開拓や社会情勢を見据えた指導内容の一層の工夫・改善があげられる。

また、「学校教育実践研究Ⅰ」と「学校教育実践研究Ⅱ」では、教育実習を終えた学生の感想や課題を踏まえ、模擬授業などを充実させることで指導内容の改善を図ってきた。具体的には、これまで4年前学期で実施していた「学校教育実践研究」を3年後学期で「学校教育実践研究Ⅰ」と4年前学期で「学校教育実践研究Ⅱ」として実施することにより、指導内容質量を充実させることができ、学習指導案の書き方や模擬授業の徹底など教師としての力量を高めている。

言うまでもなく、学習指導案と模擬授業は表裏一体である。特に、学習指導案は授業の設計図であり、作成段階や模擬授業終了後のきめ細かな指導は、教育実習の際に質の高い授業を行う上で欠かせないものである。つまり、授業の完成度が高ければ高いほど、その内容に見合った指導助言を受けることができるため、学習指導案や模擬授業の指導は重要である。

さらに、教育基本法や学校教育法など教育関連法規や学習指導要領についてもその内容について理解を深化させることで、指導内容の根拠を明確にするばかりでなく、多くの教育関連事項と関連づけて捉えることができるようになるものと考えられる。

今後、教職関連科目の内容を有機的に融合させることで、指導内容の創意工夫を図るとともに、教育学部と他学部との相互連携・協力が一層求められている。

参考図書

琉球大学教育学部附属教育実践総合センター：教職キャリアをゲットするまるごと全百科－最新カリキュラム・教員採用試験から免許更新制まで―、明治図書　2008.

文部科学省：小学校学習指導要領、東京書籍、2008.

文部科学省：中学校学習指導要領、東山書房、2008

文部科学省：高等学校学習指導要領、東山書房、2009

佐藤春雄：教職概論―教職を目指す人のために―、学陽書房、2007

資料1　　教職に関する科目（教諭免許一種）モデル一覧表

受講学年	授業科目	単位	受講年次・学期	科目内容	科目分類
1年次	教職研究	2単位（必修）	1年前期	教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。）、進路選択に資する各種機会の提供等	教職等の意義等に関する科目
	教職指導	1単位（必修）	1年後期	職場体験、コミュニケーション能力の育成	教育実習
	教育原理A	2単位（選必）	1年	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	教育課程及び指導法に関する科目
	教育原理B				
2～3年次	教育史	2単位（選必）	2～3年	教育に関する歴史	教育課程及び指導法に関する科目
	教育心理学	2単位（1科目履修）	2年	幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（生涯のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）	
	青年心理学				
	各教科教育法 （国語科教育法A） （国語科教育法B） （社会科教育法A） （・・・・・・・・・・・・・）	2単位（必修・選択）	2～3年	各教科の指導法	
	教育課程・教育方法	2単位（必修）	2～3年	教育課程の意義及び編成の方法・教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）	
	道徳教育の研究	2単位（選必）	2～3年	道徳の指導法	
	道徳心理学				
	特別活動に関する研究	2単位（必修）	2～3年	特別活動の指導法	
	生徒指導	2単位（必修）	2～3年	生徒指導の倫理及び方法	生徒指導教育相談及び進路指導等に関する科目
	教育相談	2単位（1科目履修）	2年	教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む）の理論及び方法、進路指導の理論及び方法	
	カウンセリング		2年		
	進路指導の心理学		3年		
3年次	学校教育実践研究Ⅰ	1単位（必修）	3年後期	模擬授業等	教育実習
4年次	学校教育実践研究Ⅱ	1単位（必修）	4年前期	教育実習事前指導・事後指導	教育実習
	教育実習	2又は4単位（必修）	4年通年	中学校・高等学校現場教育実習	
	総合演習（教職実践演習）	2単位	4年後期	平成22年度入学生より「教職実践演習」に変更	

資料２

平成21年度「教職指導」職場１日体験プログラム

○1日職場体験割り当て表

クラス	１組	２組	３組	４組	５組	６組
派遣校	中部商業高校 (25～28名)	首里東高校 (25～28名)	小禄高校 (25～28名)	浦添商業高校 (25～28名)	豊見城高校 (25～28名)	球陽高校 (25～28名)
	普天間高校 (25～28名)	松島中学校 (25～28名)	那覇商業高校 (25～28名)	浦添高校 (25～28名)	那覇西高校 (25～28名)	北中城高校 (25～28名)
担当名	本永　清	仲筋　一夫	浦添　正光	大城　郁男	下地　敏洋	上門　清春

※各クラスとも、職場体験校の派遣人数は各学校約２５～２８名程度とする。

○　日程

実施日：**平成２１年９月２８日（月）**

時　間：８：３０～１７：００

集　合：学生は現地集合、現地解散とする。(AM8:00までに各学校の正門前に集合、8:15出席点呼)

引　率：各講座担当教員が行う（但し、出席点呼のみ教員養成運営委員に一部お願いする）

(職場体験スケジュール表：参考例)

No	校時	実　習　内　容
1	職朝	職場体験受講学生の代表あいさつ ・学生を各ホームルームに配属する（各クラス１～３名程度）
2	SHR	各ホームルームにて自己紹介
3	１校時	校長訓話（学校経営方針・教師像・学生に望むこと等）
4	２校時	学校教育活動の説明（学校行事、進路指導、生徒指導、部活指導等）
5	３校時	授業参観（各クラスに1～3名程度配置）
6	４校時	授業参観（各クラスに1～3名程度配置）
7	昼　食	
8	５校時	先輩教師の講話、質疑応答（できれば、初任研対象教師、中堅教師の２名） ・教師になった動機 ・採用試験までの道のり ・教師としての苦労や喜びなど
9	６校時	まとめ（控え室にて、各自本日の行動の記録・感想など記録紙に記入）
10	SHR	各クラスへ
11	清　掃	生徒と一緒に参加すること
12	交　流	在校生との懇親、または部活動見学（PM5:00まで）解散

注１）　No１の校長訓話については、校長の都合の悪い場合は、教頭での対応も可能です。

注２）　No３～７については、学校の実情によって、順序または内容変更は可能です。

注３）　No５，６の授業参観は、導入から展開、まとめまで５０分間の授業の流れをしっかり観察することになりますので、クラスへの学生の配置をお願い致します。
尚、学生に授業サポートをお願いすることは可能です。

※３校時目と４校時目は教科（LHR等でもかまわない）を変えての授業参観となります。